



びわこの 考湖学

— 第2部 —

51

琵琶湖の西岸に広がる比良連峰は、平安時代中期以降天台僧の修行の場として賑わいを見せ、多くの寺院が山中に営まれました。江戸時代にはこの様を「比叡山三千坊・比良山七百坊」と表現しています。また、平安時代に編纂された歌謡集「梁塵秘抄」には比良山と修行僧の様が次のように詠われています（聖（修

行僧）の好むもの、比良の山こそ尋ねなれ 弟子やりて松茸、平茸、滑薄（えのきたけ）さては池に宿る蓮のはい（れんご） 根柢菜（じゆんさい）、牛蒡（ごぼう）、薺（なづな）（ひょうほね） 独活、藜（つばき）」。山の恵みの元、自然と一体となって修行に励む僧の姿が目に浮かぶやうです。

さて、ダンダ坊遺跡ですが、比良川が支流を集める大津市北比良の「出合い橋」の北登山者で賑わう「出合い小屋」の背後に広がる、天台宗の山岳寺院の跡と考えられる遺跡です。遺跡は大きく2つのブロックに分かれます。1つは尾根の先端に展開する寺院の主要伽藍部分と、比良川の右岸に500m以上にわた

ダンダ坊庭園

たって展開する坊跡群です。

今回紹介するダンダ坊庭園は、この坊跡群の最奥の最も広い坊（露敷？）にありますが、この坊の構造が変わっています。特に入り口は石垣を直角に曲げた構造、そつ、城郭の入り口に見られる、敵の侵入を防ぐ内升型虎口の構造なのです。庭園は更にこの露敷の奥にあり、築山を

ダンダ坊庭園から徒歩約20分の距離にある神爾滝



壮な滝です。このような素晴らしい滝の下に、どうして観念的な滝の造形をしなければならぬのでしょうか？

その意味は、この庭の露敷が城郭の構造をとっていることから推定されます。庭の主は武家だったのでしょうか。彼によって庭は芸術鑑賞の場ではなく、これを背景に臣下に杯（もちろん酒入り）を授けらるることにより、臣従関係を確認するための儀式の舞台装置として機能していたのです。それは、庭という空間の中に自然を再現できる者、すなわちその者は「自然（神）」の支持を得た者」ということを象徴しているのだと思います。したがって、庭を持つことのできる者は「神」に導かれた者であり、その領国を支配する「格」を有する者であることになるのです。

自然の景を人工的に表現してあります。どうして？この庭園はとも深く、美しい自然の中にあります。建物が失われた遺跡だからそう感じるのでしょうか？この庭園からわずか20分ほど谷を登ると「神爾滝」があります。滝上から落下した水は途中の段で水平に跳ね返り、さらにこの水が前面の岩壁に当たり流れるといふ、県内の滝の中でも最も豪華

比良山中に眠る古庭は、自然に対する信仰に基づく歴史の「コマ」を語りかけてくれます。（財団法人滋賀県文化財保護委員会 大沼芳幸）

臣従関係確認のための舞台